
放課後RPG

グゴム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後RPG

【Nコード】

N3593Y

【作者名】

グゴム

【あらすじ】

ある放課後、突然、クラス全員が剣と魔法のファンタジー世界に飛ばされた。

1 放課後RPG

それは一瞬だった。

俺、一橋空海はいつも通り幼なじみと一緒に登校し、退屈な授業を全力で聞き流し、

休み時間に親友と最新ゲームについて意見交換をし、

ホームルームが終わって家に帰ろうと席を立った瞬間、

突然に世界が変化した。

見慣れた教室から何の前触れもなく、何の音もなく、何の抵抗もなく、

教室にいた全員が、周囲を木々に取り囲まれた薄暗い広場にいた。

ポトポトと椅子に座っていた連中が尻餅をつく。

突然の理不尽な仕打ちにうめき声を上げる

そして周りを見渡して声を失っていた。

しばらくの静寂のあと、爆発するようにクラスメイトが騒ぎ始めた。

『何！？、何が起きたの！？』

『ここ何処？』

『どうなってるんだ？』

その大騒ぎが逆に俺の頭を冷やしていった。一回大きく深呼吸をして、周囲を見渡す。

周りは鬱蒼とした森林。俺たちのいる広場には中央にとんでもなくデカイ樹があった。幹の直径は少なく見ても数十メートルはある。

広場はこの樹が張るさらにバカでかい根っこによるものだろう。上空を見上げるとその大樹から伸びる枝葉によって空が隠されている。

薄暗い原因はこれのようだ。他には…っと。

相変わらず騒ぎが収まらない中、聞きなれた声が聞こえた。

「おっす。クー」

「タクヤか」

牧原タクヤ（まきはら たくや）。男。出席番号30。イケメン。中身は重度のネットゲーマー。いわゆる廃人だ。小学生の時から付き合いがある。その頃からこいつは当時最先端だった有名MMOにおいてトッププレイヤーだったらしい。今もその世界では有名人との事。俺はコンシューマーゲーム派なのでよく知らないが。分野は違えど重度のゲーマーという共通点を持つこいつとは昔から気が合う。

あとクーは俺のあだ名である。空海だからクー。俺自身はあまり好きでは無い。元凶は幼なじみのバカ。

「クー。この状況どう思う？」

「みんなの事か？まあ王子がすぐに収めるだろ」

「そうじゃなくて、この『世界』についてだよ」

「ああ。どうだろうな。少なくとも日本ではなさそうだな」

「ということは、ついに俺たちは異世界に召還されたんだね！？」

「さあな。もしそうなら試しに魔法でも使ってみるか？」

それはいいとタクヤは言うと、手を突き出しながら、自身のプレイしているゲームの魔法と思われる名前を叫び始めた。まあなにも起きないわけだが。

「クー。タクヤは何してるの？」

「ん。現実逃避だろ」

不安そうな眼をしたポニーテールの女子が声をかけてきた。

更科沙愛。^{さらしな さあき}女。出席番号16。幼なじみ。家が隣同士というテンプレ的状况に加え、幼稚園から現在の高2にいたるまで皆勤賞で同じクラスというもはや呪いと思えない腐れ縁の仲。明るくて容姿も良く、結構もてるらしい。俺にはどこが良いのかわからないが。

いつもはカラカラと明るいやつなのだが、さすがにこの状況ではそんな訳にもいかないようだった。しかし真剣な様子で変なポーズを決めながら叫ぶタクヤをみて、ちよつとは笑っていた。魔法詠唱が無意味に終わり、軽く落ち込みながらタクヤが帰ってくると、さあきがよくわからないけど、どんまいと声をかける。

「ねえ。さっきから変な文字がいっぱい出てくるんだけど、これって二人にも見えてるの？」

「は？ どんなのだ？」

「なんか、みんなを見ると出てくるの。名前とか数字とか『Lv1』とか」

タクヤと顔を見合わせる。

「それって、ステータスかな？」

「だろうな。おいさあき。それって一人一人に見えるのか？」

「たぶん。いっぱいあるからワケわかんないけど」

「じゃあタクヤを見つめて、書いてあることを全部読んでみてくれ」
「全部？ いっぱいあるけど…。えーと『牧原タクヤ・Lv1・HP158・STR7・DEX11・VIT15・AGI10・INT30・CHR21・スキル／時術1』かな」

確定だな。ステータスだ。どうやらステータスがある世界らしい。

「でもどうゆうことだ。俺たちには見えないぞ」

タクヤが首をかしげる。俺は目をつむり、『ステータス』と念じてみた。すると脳裏に文字が羅列された電子ウィンドウが現れた。

一橋空海

LV1

HP189

STR11

DEX23

VIT12

AGI30

INT8

CHR16

スキル／死1

「二人とも、眼を閉じて『ステータス』って念じてみ」

「えーと？ おお。ステータスだね。さあきが言ったことが書いてある」

「あ。これこれ。私が言っている文字」

「さあき。お前はスキルの所になんて書いてある？」

「んつと。『解析』かな」

「なるほどねえ」

どうやら異世界にきたことが確定したようだ。いやゲームの世界の中？ レベルにステータスにスキルがあるんだし。俺のスキルは『死』

でタクヤは『時術』、さあきは『解析』。さあきの『解析』は人のステータスを調べるスキルみたいだな。タクヤの『時術』は呼んで字のごとくだろう。俺の『死』はよくわからんし、ステータスについてまだまだよくわからんな。

「スキルにレベルか。典型的なRPGだね」

「ああ。ということは、おそらくモンスターもいるだろうな」

「HPもあるしね。やっぱりHPがなくなったら死ぬのかな？」

「どうだろうな。実際HPが無くなる＝死亡ってゲームはそこまで多くは無いものだけど。でもまあ試すわけにはいかないが」

「うーん。あ、そういえば、だいぶみんな落ち着いたみたいだね。

さすが王子」

「そうだな。じゃあ王子とも相談するか」

落ち着き始めたクラスメイトの中で、ひととき大きな集団の中心にいる男子がみなに落ち着くように指示を出している。

王子こと天王寺 淳^{てんのうじ じゅん}。男。出席番号20。カリスマ。高1から生徒

会長になってみたり、剣道四段だったり、全国模試も上位キープしてみたり、とやりたい放題な才能。家は貧乏らしいが（弟、妹が合わせて10人近くいるそうだ）その分性格が良い奴すぎているスーパー高校生。

王子に話しかけ、タクヤが今分かっている事を説明する。ここは現実ではないこと。ステータス、スキルの事。その話を周りで聞いていた奴らが信じられない、もしくは理解できないといった表情を浮かべる。その中で王子はすぐに自身のステータス、スキルを確認していた。

「スキル 天賦の才（剣） 1 、光術 1 、とあります」

「さっすが王子。完全に勇者ですね。本当にありがとうございます」
まったくだ。なんで2個もスキルがあってしかもそんなに勇者っぽいんだよ…。爆発しろ。

王子は異世界であることに納得すると、次にこれからの事について聞いてきた。俺たちはとりあえず人のいる集落に行くべきだと主張。王子も同じ考えのようで、最初の問題はどうかやって集落を見つけたかった。俺は上空に広がる大樹を見上げながら言った。

「なあ：異世界召還物ってさ。大体、身体能力が強化されてるよな」
「確かに大体そうだね」

「そういう物なのですか？」

俺は、試してみるかと呟いて後ろにいたさあきを見詰めた。

「おい。さあき。ちょっとその場でジャンプしろ」
「は？」

タクヤは何かに気付いたようにニヤニヤし始めた。王子はじつとさあきを見つめている。首をかしげながらも、さあきがフツと軽くジャンプした…。：ように見えたが、現実には3メートルほどの大ジャンプになった。予想だにしない大ジャンプにさあきは軽くパニックに陥り、はたためくスカートを抑えることさえ忘れて空中で騒いでいる。

「おー跳んだなー」
「白だ！やっぱ白が至高だよね！」
「…これは」

喜ぶタクヤと無言でガン見している王子。俺はさあきのなんか見ても嬉しくもなんとも無いのだが。降下中に我に返り、スチャッと華麗な着地を決めたさあきに三人ともぶん殴られたのは言うまでもない。

と、言うことで俺たちは広場中心におわす大樹に登って周りを見渡すことにした。ぱっと見、高層ビルくらいの高さがあったが、ごつごつして足場は十分にあったし、ジャンプ力も冗談みたいの有ったので問題無く登ることができ、その結果、森はしばらくするとに草原に開けており、その先に集落のようなものが確認された。

次の問題は移動、そしてこの約40人の身元不明者で街に入れるか、ということだ。

しかし、夜になってしまうと色々とマズイだろうという事で、俺たちはすぐに移動することにした。

結論から言うと甘かった。モンスターが現れて一人殺された。歩く植物っぽいのがモンスターが不意打ちを仕掛けてきて、集団から離れ気味だった男子を、みんなが気がつく前に食い殺した。俺たちが気がついたのは、非現実的なそのモンスターがさっきまで人間だった物体の一部分を持って近づいてきた時で、当然クラスは一瞬で恐慌状態に陥ったが、王子とタクヤの統率力と、スキル『天賦の才（格闘）』持ちの奮闘により危機を脱した。

仁保姫紅亜礼にほひめくあら。女。出席番号24。見た目ツインテールのロリっ娘（150cm無い）。あまり接点が無いため詳しい性格などは知らない。さあきによると家が古武術的な物の道場で、普段はかわいらしい妹みtainな性格らしい。

戦闘中の雰囲気には鬼気迫るものがあったが、それよりも敵を倒し

た後の、

「こわかった。テヘッ」

発言の方が俺を戦慄させた。戦闘自体は仁保姫の一方的な勝利であり、その際いくつかこの世界の戦闘ルールが判明。

- ・ダメージを食らうと、敵にも味方にもHPバーのような物があらわれる。
- ・モンスターは倒すと、ドロップ品や変な結晶になる。
- ・HPバーは徐々に回復し、Maxになると消える。

完全にゲームの世界に入り込んだようだ。

その戦闘の後は注意深く円陣を組み、周囲を警戒しながら固まって進んだ。森を抜けるまでにさっきの植物やゴブリンっぽいモンスターの襲撃を何回か受けたが、そのすべてを仁保姫が一人で撃墜していった。ロリっ娘こえー。

森を抜けてから草原に出る。遠くにウサギ型のモンスターやゴブリンっぽい人型のモンスターを見かけたが、こちらの人数が多いためか、遠巻きに見ているだけだった。それでも先ほどの不意打ちの恐怖は忘れられず、みな緊張して歩いていた。朝から歩き詰めのわりに、誰一人脱落者がいないのは、やはり身体能力が向上しているからか。

草原に入ってからのは回りも見渡せて警戒を強める必要が無かったの
で、メニューについて検証。目をつむり色々念じてみると、所有ス
キル一覧が確認できた。

死；一撃死 パッシブスキル

次の条件を満たした時、対象を即死させる。

- ・対象が攻撃を認識していない
- ・短剣による直接攻撃である
- ・攻撃が急所に当たっている

なるほどねえ。どうやら暗殺スキルらしい。だったら最初からスキ
ル『暗殺』にすればいいのに。とりあえず、いま使用できるのはこ
の『一撃死』だけのようなだ。まずは短剣を入手しないといけないな。

王子とタクヤは全員で街に入る作戦を考えているようだったが、あ
まり興味がなかったので俺は話し合いに参加していない。まあ、あの二
人なら何とかしてくれるだろう。現実世界と電脳世界のカリスマが
組み合わさり最強に見えるってね。

昼前に街に到着した。見事な中世ヨーロッパ的ファンタジー調の建
物群。街というか村に近いというのが第一印象。周囲を堀と木の柵
に囲まれ、中央に森から川が流れ込んでいる。

当然のように人の出入りには厳しいと思って何パターンもの芝居を
考えていた王子たちの当ては外れ、意外にも問題は起きなかった。
言葉もふつーに通じたし。

どうもこの街は辺境開拓の拠点のような位置づけらしく、人の移動
についてはかなり大らかなようだ。さすがにこの世界では学校の制

服は浮いているようだったが（しかもみんなお揃いだから余計怪しい）王子らは逆に怪しさを逆手にとって門の兵士長らしいおっさんを丸めこみ、この街の領主と面会する約束を取り付けたようだ。まじめに聞いてなかったが要するに俺たちは流浪の騎士団みたいな位置づけになったらしい。とにかく街に入れないという事はなさそうだ。

「なんだ、クーは一緒に行かないのか？」

タクヤが意外そうな顔で尋ねてきた。横にさあきも心細そうな顔でいる。

「ああ、俺は先に街を見ておくよ。後で話を聞かせてくれ」

「じゃあ私もクーに付いていこうかな……」

「お前はタクヤたちと行け。邪魔だ」

ぶーぶーと文句を言うさあきを無視して俺はみんなと別れた。

やれやれ。やっと自由に動けるか。どうも集団行動ってのは苦手だな。

ぼりぼりと頭を掻き、まずは金からか、と独り言をつぶやきながら人が集まる市場の中に足を進めた。

2 検証

2

この街はウルドと言うらしい。建物は木造が多く、森から流れ出る小さな川を中心に大小の家々が軒を連ねている。街の規模はそれほど大きくないように見えるが、中央広場には昼間から酒をかつ食らい騒ぐ人々の群れ、通りには人々が行き交い、なかなか活気がある。広場周辺には食品やら日用品やらの店が軒を連ねていて、お昼過ぎと言うことも有ってうまそうな匂いがそこから漂ってくるが、あいにく金がない。

怪しげな商品売っている露天商のおっさんに、ポケットに入っていた携帯電話を古代文明の遺産だとうそぶいたらずいぶん興味をもってくれた。光や音が出るのが珍しいらしい。細かな装飾がなされた短剣が目についたので、これと交換でどうだと聞くと、そんなものでいいのかと即商談成立。電波の無い世界で携帯なんか持ってもしょうがないし、どうせすぐに電池が切れるだろう。おっさん、たぶん一日くらいしか楽しめないだろうな。どんまい。

あと仁保姫が倒したモンスターから出てきた結晶を見せて、これは買い取ってくれるのかと聞くと、魔石は冒険者ギルドに持っていけと言われた。やっぱりあるのか、ギルド。ちょうどいいので冒険者ギルドの場所も聞いて、おっさんと別れた。

冒険者ギルドはまとめると次のようなものだった。

- ・モンスターの素材を集めるか、賞金モンスターを狩ることが仕事
- ・お手伝い系の依頼は無く、要するにモンスター退治が専門との事

・報酬の高さがそのまま危険度であり、お決まりのランクは無いらしい

「薬品とか食糧とかって売ってる？」

「それならあちらのカウンターで少々」

「そうか。あと、魔法ってどうやって覚えるんだ？」

「スキルのことですか？それならどこでも売ってますよ。冒険者用スキルでしたら物品と同じカウンターで売っております」

「ってことはギルドって他にもあるのか？」

「ございます。戦士ギルド、魔術ギルド、迷宮ギルド、鍛冶ギルドなどが有名です。盗賊ギルドや暗殺ギルドなどは別の意味で有名ですね」

そんな感じで受け付けのお姉さんや売り子の少女から情報収集。貨幣ルールや周辺地理、政治体制やモンスターの位置づけなどの世界観はなんとなくわかった。特に変わっている所はスキルが売り物という点。魔石（モンスター倒したときに出る石）に封じられてて、砕くと覚えられるとの事。拾った魔石でも良いのかと聞いたら基本的にダメとの事。要するに魔石は容器で、最初は不純物が詰っているが、それを抜いてから色々と詰め込めるカラクリらしい。素直に拾った魔石売って、とりあえず一つだけ買えた『ダッシュ』を使ってステータスをみたら、確かにスキルが増えていた。

他のギルドについても気になるが、武器も手に入れたし、とりあえずモンスター狩りに行く事にした。残りの金を食事と薬品に変えて、周辺モンスターの情報を聞いて草原へ出発。

都市周辺のモンスターは弱かった。森で出会ったような凶暴そうな怪物はあまり居らず、小動物にたまにゴブリンがいる程度だった。まあ、仁保姫のように簡単に倒せるというわけには行かなかったが、

十回ほど切りかければHPを削りきれぬ。AGIが高いせいか、敵の攻撃は簡単に避けられるので、とりあえず殺される心配はあまりなさそうだ。

さっきまでは仁保姫がぶん殴ればそれで済みだったからあまりグロい事にならなかったのだが、やはりモンスターを刃物で切ると血がどぼどぼと噴出してくる。かなりのスプラッタ映像なのだがなんとなく現実感が無い。自分でも不思議に思うくらい何も感じなかった。モンスターと割り切れているのか、それとも自分でも知らないくらい『残酷』だったのか。まあ、あまり深く考えないことにしよう。

次に覚えたてのスキル『ダッシュ』について。これは、体感で2倍ほどの速度で走れるスキルだった。ただし直進限定。

これもAGIが高いせいか、現実世界よりかなり早く動いていたが、このスキルがあると、直進だけなら、原付並みの速度は軽く出せた。コントロールが難しかったが、練習すればなんとでもなるだろう。

次にスキル一撃死について。ダッシュも用いながら、何回かモンスターの背後から襲ってみたが、結構むずかしい。まあここが身を隠すものがあるまいない草原だからかもしれないが。ちよつとでも気づかれたら発動しないし、また急所以外を攻撃すると失敗して通常のダメージしか与えられなかった。そもそも急所に当てろってのがきつい。人間型や動物型ならなんとなくわかるが、このてんとう虫型はどこが急所なんだよ。まったく。

何回か練習がてらにゴブや小動物を惨殺。死がスキルアップ。

LV 3
HP 197

STR 15
DEX 33
VIT 13
AGI 43
INT 18
CHR 30

スキル／死2 ダッシュ1

レベルも上がっていた。DEX、AGI、CHRの伸びが良い。DEXとAGIが上がるのは助かるが、CHRは上がっても意味なさそうだが。あと、ステータスはレベルで上がるのか、スキルアップで上がるのか。タイミングをしっかりと確認しないといけないな。

練習の結果、この辺りのモンスターなら背後から即死させられるようになった。てんとう虫以外。

だいぶ日が傾いてきた。太陽が地平線に近づき、夕焼け色になり始める。ウルドの街は半面を深い森に囲まれており、反対側には草原が続いていた。その草原の真ん中を街道が延々と延びている。街道の先には商業都市、そしてその先にはこの国の首都があるらしい。

森は開拓を進めているようで、俺とおなじくモンスターを狩る冒険者、木を刈るきこり、耕作をする農民などの人々がそれぞれの仕事をこなしていた。夜が近づき、みな片付けの作業に入っているようだ。

俺もそろそろ街に戻るかと考え、市街に向かっている途中、頭部だけ真っ赤なゴブリンを発見。冒険者ギルドで赤いゴブリンという記述の手配書を見た記憶があるのでおそらく賞金モンスターだろう。すこし悩んだ。背後から急所（ゴブの場合は首であることは確認済み）を刺せばおそらくはスキル『一撃死』で倒せる。しかし失敗してガチでの勝負になったとき勝てるかどうかは未知数だ。あきらかに他とちがって強そうだし。

さてさてどうしようかな。まあ薬品はいっぱい買ってほとんど使っていないからやってみようか。最悪全力逃げで。

相手の視線の外からのダッシュを開始。音を立てないように間合いを詰めて、最後は走り幅跳びのように水平方向にジャンプ。

一気に近づき、短剣を首筋に突き立てた。

一撃死が発動したようだ。HPバーが現れることなく、赤いゴブリンが光を纏いながら消滅する。大きめの魔石をゲット。ゴブの落とした棍棒やら汚い布きれとかはポケットに入りきらないのですべて放置。というか魔石だけでももうやばい。もちきれん。

冒険者ギルドに帰って魔石売却。カウンターの女の人が一個一個、鑑定スキルを使って値段を決めていた。赤いゴブ（ヘッドレッドと名付けられてたらしい）の魔石の時はちゃんと賞金をくれた。ギルド内のショップで収納用の袋を購入し、みなと合流するためにギルドを出た。

とある宿屋を貸し切って、クラスの連中全員分の部屋が確保されていた。どこにそんな金があったのかと思ったが、領主の計らいらしい。なぜここまで優遇されるのか腑に落ちないが、とりあえず今日得た情報を共有するために、皆で広間に集まった。俺は今日得た基本的な世界観とモンスターとの戦闘などについて報告。分かりにくい説明だったが、ゲームに詳しい奴らが噛み砕いて説明してくれるだろう。

次に領主との謁見に臨んだ王子の話。

騎士団を名乗るもやはり怪しまれる↓実力を証明するために相手の護衛騎士と模擬戦↓王子無双↓領主感動↓周辺の魔物退治を頼まれる↓前金として金をもらう。

ありえない。漫画的に言う主人公補正、またはご都合主義か。とにかく妙にウマくいきすぎている。この状況が物語なら間違いない。主人公は王子だな。

王子はみんなに魔物退治を手伝うことを提案。このクラスには男子17人女子20人の37人いたが、一人殺されてしまったため現在36人だ。全員で動くには多すぎるので、何人かに分かれてパーティを作って行動することになった。

たしかにこの周辺のモンスターは弱いから、戦闘に慣れるためにはちょうどいいだろう。

隣のさあきに、『解析』を使ってクラス全員のステータスを書き出

す作業をさせながら、話し合いの流れを見守っていると、タクヤが話しかけてきた。

「クー。組もうぜ」

「ああ。それは構わないけど、俺はさっさと別の街に行くぞ？」

「元からそのつもりだよ。みんなは王子に任せとけば大丈夫だし。じゃあ決まりだな」

「私も行く！」

さあきがかぶりつく様に話に割り込んできた。まあパーティを作れって言われてるしな。

「はいはい。わかったからさっさと作業を終わらせろよ」

「やった！二人ともよろしくね！」

カラカラと喜ぶさあき。満面の笑みを浮かべながらタクヤの手をとってぶんぶん振り回している。

「そうだ。クアラも誘おうよ！」

「仁保姫は大人気だろ。ほら、あんなに囲まれてる」

指を指した方向には、小さなツインテールが人に埋もれるように動いていた。みんなが仁保姫とパーティを組もうと取り囲んでいるからだ。あいつと組めれば安全ってことは確定しているわけだからそりゃ人気だろうよ。

「大丈夫。まかせといて！ほらタクヤいくよ？」

「へ？なんで俺も？」

さあきは戸惑うタクヤを強引に引っ張って仁保姫争奪戦の現場に突

進していった。あいつまだ作業終わらせていないのに。やれやれ。

「おい。空海」

「あん？」

見るとひょろつと背が高い坊主頭の男が笑顔で立っていた。

門倉 風。男。出席番号7。キングオブ童貞。かなりの強豪であるうちの野球部でレギュラーを張るくらいの奴。顔はまあ坊主だけど悪くは無いのだが、なぜかモテないことをよく俺に愚痴ってくる。なぜだろうね。いまでも爽やかなスポーツマンスマイルで純粋な目をキラキラさせているのに。

「この世界に性奴隷っているかな？」

前言撤回。嬉しそうな顔しながら何を言ってるんだこいつは。さっきまで爽やかに見えていた笑顔が一気にうさんくさく見えてきた。

「この街では奴隷市は無さそうだったが。東の教国でも禁止されてるらしいし」

「なんだと！」

「でもこの国は西の帝国寄りだからどこか大きな町なら売ってるんじゃないのか？」

「よしきた！」

ガッツと音がしそうなほど大げさなガッツポーズをしてからこのハゲは言い放った。

「おれは奴隷ハーレムを作るぞーーーー！！！！！」

だめだこいつ……。早く何とかしないと……。

「金を貯めて、アジトを作って、そこで女を囲う。5人、いや10人は欲しいな。巨乳にロリに金髪に褐色に姉妹丼、ああこの世界ならエルフや獣人もいるのかな。やっべ！ちょー興奮してきた！」

「たしかに奴隷ハーレムって男のロマンだけどさ、実際には金も掛かるし、結構面倒だとおもうんだが……」

「お前はさっさと他の街に行くんだろ。おれもついていくな！そして奴隷市を探す！」

無視された。まあバカで童貞で暑苦しいやつだが、悪い奴ではないからいいか。これで4人。と思ったら仁保姫争奪戦に出向いていた二人がお目当て連れて帰ってきた。どうゆうトリックを使ったのかと思ったが、仁保姫がさあきの後ろで顔を赤くしながらタクヤを見ていたので、そうゆうことかと納得した。

これで5人。数としてはいい感じだ。俺たちはすぐにこの街を出る予定だし、こんなもんだろう。この街でレベル上げしているほうが安全なことは確実だしな。

とりあえずリーダーはタクヤに決定。明日は朝から手分けして旅の準備を整えて、明後日出発ということになった。

3 チュートリアル

3

異世界二日目。今日は手分けして旅の準備をすることに。俺は情報収集と称してギルド巡りへ。まずは魔術ギルド。ローブに例の帽子をかぶった魔法使いが見れるかと思いきや、座っていたのはヒゲ面のいかついおっさんだった。ダボダボのスラックスにエプロン姿で読書中。あまり魔法使いには見えない。気を取り直して店員のおっさんと世間話をしながら魔術について話を聞いた。

- ・この世界では火水土風の術が一般的
- ・スキル習得用ではなく、魔術自体が込められた魔石もあった。
- ・魔術を生活に利用するのが仕事らしい。

「この魔術の込められた魔石っておっさんがつくってるのか？」

「ん。魔封石のことか。まあ俺がやってるものもある。値段が高い奴はマスターが作ったり、他の街のギルドから仕入れたりしたりしてるやつだな」

「それって簡単にできる？」

「まあな。ある程度スキルを上げれば低ランクの術なら簡単だ。上位魔術は魔石の質も重要だから難しい」

「なるほどねえじゃあさ。魔術って使いすぎるとどうなるの？」

「そりゃぶっ倒れるさ。」

「ふーん。あと、魔術ってその4つ以外にもあるの？」

「あるぞ。ヴァナヘイム教皇の神術や伝説の竜術とかだな。まあどれもお目にかかるのすら難しいが」

どうもこの世界の魔法使いは技術屋っぽいというのが感想。モン

スターからでた魔石を生活に利用しているようで、この魔法ギルドにも火術をこめた魔封石を埋め込んだカンテラや水術をこめた魔封石を埋め込んだ水筒など、便利そうなものが並んでいた。魔法については大体わかったのでとりあえず一通りのスキル魔石とカンテラ、水筒などを買って魔術ギルドを後にした。

次に戦士ギルドにやってきた。ここは護衛や用心棒の依頼の取り扱いをしているようだ。運搬やら盗賊退治とかもある。どうもこの世界では、

冒険者ギルドⅡモンスター関連
戦士ギルド Ⅱ犯罪・生活関連

と住み分けをしているようだ。

スキルは武器スキルを中心に置いてあったので、みんなの分も買っていくことにしよう。俺は短剣。タクヤは後衛だから魔法杖っと。さあきは何だろ。てきとーに棍棒にでもしておくか。鬼に金棒ってね。仁保姫はもうすでに天賦の才（格闘）があるからいらないか。フーのハゲは…あの能力じゃあ必要なさそうだが、一応片手剣くらいは買っておこう。

しかしこうして考えるとこのPT前衛少ねーな。俺は特殊職だしタクヤは魔術職、フーは遠距離で、さあきにいたっては戦闘向きのスキルですら無いか。まあスキルも調整していけばなんとでもなると思うが。

その時、一人の女が店に入ってきた。見慣れたウチの高校の制服だ。目が合って軽く会釈をしてくる。こちらも、よっ、っと手を上げて返事をしたが、さて、誰だっけ？見たことあるような顔だが、名前が出てこない。落ち着け。とりあえずいつも通り知っている振りを…

「六道。りくどうあやね。実際に話すのは始めてだね、一橋君」

名乗られてしまった。あーそんな名前のやつもいたね。

六道あやね。女。たしか出席番号が一番後ろの37番だったはず。ボブカット気味の黒髪と整った顔立ち。美人ではあったが無口で、いつも一人でいる目立たないタイプだった。はず。もちろん接点はないのでよく知らない。

「お前も買い物か？」

「うん」

一言答えて、黙る六道あやね。その無表情からはなにを考えているのかさっぱり読み取れない。たしかに美少女なのだが、どこか影があるといった様子だ。わりと苦手なタイプかもしれない。

多少の居心地の悪さを感じていると、六道が距離をつめてきて、上目遣い気味に言った。

「一橋君たち、すぐに街を出るのよね？私も連れて行って欲しいな」

「……それは構わないが、王子達といった方が安全だと思うけど。一応理由を聞いてもいいか？」

「笑わない？」

「ん？ああ」

「ほんとに？」

「笑わないって」

「私。魔王になりたいの」

「……は？」

夕暮れ時の教室で物思いにふけり世界の子供達が飢餓で死んでいくのに戦争をやめようとしないうろかな人類を嘆いていそうな高貴で清楚なこの美少女は、魔王になることをご所望らしい。なるほど。世の中不思議が一杯だ。

「一応理由を聞いてもいいか？」

「だから、魔王になりたいの」

「いや、そうじゃないくて、その魔王になりたい理由」

「それは……」

顔を真っ赤にしながら下を向いて恥ずかしがる六道。

「悪い。ちょっと意外すぎて動揺した。忘れてくれ。うん。ちょうど今5人しかいなかったからちょうどいい。一緒に行こう」

何がちょうどいいのかわからなかったが、慌てて了承した。余りに意外な理由に何も考えずに聞いてしまったが、人には聞かれたくないことぐらいあるよな。うん。

心底ほっとしたような顔で礼を言う六道。一瞬赤くなった顔もすぐに下の無表情に戻って、やっぱり考えが読めないが、まあいいか。

六道の武器スキルも買い、次の店で一通りの武器を買ったところで午前中の買い物を終えた。

その日の昼過ぎ。入り口の門から草原に出てすぐ見える小高い丘の上にパーティの面々が集まった。目的は戦闘演習。というより初心者チュートリアルである。

「つてことで今からおまいらにロープレの基本と戦闘について教えてくからちゃんと聞けよー」

「はいはい先生ー」

3人目の女の子が入ってかなりご機嫌なさあきが調子良く手を振りながら、さっそく話の腰を折った。

「タクヤがいけないけどいいの？」

「タクヤはまだ街に用事があるってさ。それにこれから教えるのは基本だからゲーム上級者キリッの俺らにとっては当たり前の事なんだよ。んじゃはじめるぞ」

はいと生返事をするさあきと先ほどからメモを構えて準備している仁保姫。ニヤニヤとやり取りを見ていたフーと無表情の六道。この中でRPGの知識があるのは、男子のフーと、昔、俺がやってるゲームを横で見てたさあきと、実は結構詳しそうな六道の三人。しかし、前の二人はまともにプレイした事はないらしいし、仁保姫にいたってはゲームに触ったことも無いという事で、基本的なことから説明することになった。

「用語からやるぞ。まずLV、レベルのことだな。これはだいたい

の強さのことだ。高いほうが強い。上げることで強敵を倒せるようになったり、強いボスを倒せるようになる。だからレベリング、つまりレベル上げがP R Gではとても重要になる」

「次に、H P っていうのは生命力のこと。ダメージを食らうと減少する。戦闘していると頭上に現れるバーはこれを表しているみたいだ。一般的にこれがなくなると戦闘不能になる。この世界の戦闘不能ってのがどういう状態なのかは分からない。これは試してみるわけにはいかないしな。まあ現状では、石内のやつの件もあったし、おそらく死ぬと考えたほうが良いだろう」

四人の顔が一瞬強張る。石内とは昨日街に来る道中、森でモンスターに襲われて死んだクラスメイトの事。その時は実際にH P が0になった瞬間を目撃した訳ではなく、体の一部分を目撃したというだけなので、H P 0 即死亡なのかどうかは正確にはわからない。しかし甘い予想はしないほうが良いだろう。

「次に細かいステータスな。おおざっぱに言うと、S T R は力、D E X は器用さ、V I T は体力、A G I は素早さ、I N T は知力、C H R はカリスマか魅力の事だけど、どっちかはまだわからん。大体言葉の意味そのままの意味があるはずだ。じゃあ自分のステータスで一番高いやつと一番低いやつの数値を言ってみろ」

「えーと。高いのはI N T で25。低いのはA G I で10かな」
さあきの答え

「一番高いのはS T R 33で低いのはI N T とC H R が同じで8です」 仁保姫の答え

「高いやつはD E X 27とA G I 23だなー。I N T は一桁だぜ。あとは10台」 フーの答え

「高いやつはS T R 25，低いのはV I T 15」 六道の答え

「さあきによると、街の人たちのレベルもステータスはほぼ一桁で、門衛や騎士でやっとステが二桁になるらしい。ようするに俺らのステータスは一般人の数倍はあるってことになる」

「つまりこの世界では俺らはケンカに強いってこと？」

坊主頭のフーが質問する。

「数値上はそうだな。それと、この辺のモンスターのステータスも似たようなものだ。さあき、あそこにいる角ウサギのステータスを読んでみる。ああ、数字だけで良いぞ」

「えーと。ホーンラビット。HPが51でLV2、ステータスは上から7／8／5／10／3／5」

さあきのスキル『解析』。人、モンスターはもちろん、武器、アイテム、建物にいたるまで情報を得ることが出来るようだ。さあき自身は視界に何か入るたびにインターネットのポップアップのように各種ウィンドウが出てくるらしく、それを処理するためにいつも忙しそうに、指で空中に絵を書いている。外から見ると結構怪しい。

「実際、昨日この辺のモンスターと戦闘したけど楽勝だった。後から戦闘に慣れるために戦ってもらうからよろしく」

うーい、っとフーの気の抜けた返事だけが帰ってきた。他の三人もちゃんと頷いているから大丈夫だろう。

「最後に今のところ分かっている戦闘システムについて、重要な点3つを教えとく。一つ目は技の使い方。『スキル』＋『技名』を口に出すか、念じればいい。魔術も同じな。対象を取ったりするタイプの技は使い方は、おれは持ってないから良く分からんが、タクヤ

が言うにはあれに当てたいと思ってれば大丈夫だってさ。六道、俺に『ブラインド』を掛けてみて」

そうゆうと六道は無言で立ち上がり、ゆっくりと細長い人差し指を俺にむけ、つぶやいた。

『闇術』 『ブラインド』

その瞬間、指から黒い霧が沸き立ち、一瞬で俺の頭を包みこんだ。さあきと仁保姫の驚く声が聞こえる。視界が一気に暗くなり、目の前にいる六道たちの姿さえ確認することが困難になってしまった。

六道のスキル『闇術』。呼んで字のごとく闇の魔術。王子が『光術』のスキルを持っていたはずだから、それと対になる魔術だろう。今使えるのはこの視界妨害の『ブラインド』だけらしい。

真っ暗な視界の中説明を続ける。

「使用方法はこんな感じ。2つ目に大事なのはこの世界にはMPが無いこと」

「MP？」

もつともゲームに疎い仁保姫の声がした。

「そ。マジックポイントのこと。RPGには普通、『この魔法を使うためにはMPが〇〇ポイント必要』、ってシステムがある。でもこの世界にはMPというステータスはない。その代わり魔術をつかったら『HP』を消費する。今魔術をつかった六道にはHPバーが出ているだろ？」

ようやく晴れてきた視界の中、六道の頭上にすこし減少したHPバーが見えた。今のでHP10消費って所かな。

「自分のHPは減少したら視界に現れる。死にたくなかったら常に自分のHPを把握しとけ」

MPが存在せず、魔法を使用する場合にもHPを使用するゲームは余り無いが、スキルを使用する時にHPを消費するゲームは結構ある。この手のゲームでよくやるミスが、スキルを使いすぎて気がついたら瀕死という奴だ。しかもこの世界にはさらに特徴的なことがある。

「最後に3つ目。回復魔法が無いことだ」

「回復呪文って言うത്『ホ○ミ』とか『ケ○ル』とか？」

ゲーム経験のある男子のフーが某有名RPGシリーズの魔法の名を上げた。

「そうそう。もうちょっと正確に言うと『瞬間回復魔法』が無い。すくなくともこの魔術ギルド確認した限りではそんな効果の魔術はなかったし、薬品も全部試してみたがだめだった。代わりにHPは徐々に回復していくし、回復速度を増加させる薬や魔術ならあるから、それで何とかするしかないな、ま、要するに……」

「要するに、HP管理がとても重要、ということでもいいかしら？」

六道が先回りして言った。やっぱりこいつは結構やってやがるな。

「ん。そうゆう事。何度も言うが、戦闘中は常に自分のHPを意識しろよ。んじやてきとーに敵を倒してこい。一回戦ったらHP回復するまで待ってから次の戦闘に行け。あと、あんまり遠くに行くな

よ」

「「おー！」」

四人はそれぞれ真新しい武器を手に持ち、丘を下って草原に散っていった。

最後に六道も言っていたが、この戦闘システムではHP管理をミスると致命的である。なにも考えずに魔術を戦闘に用いていたら、あつという間にHPがなくなってしまう。そして、慌てて回復しようにも、徐々に回復させるしか手段がない。リアルタイムの戦闘でこれはなかなかきつい。とりあえず、余裕で勝てる相手でHP管理をしつかり習得させないといけない。連携とか陣形とかそこらへんは後からタクヤと考えよう。

その日は日が暮れるまで、街の周辺で戦闘にいそしんだ。途中からタクヤも合流して、簡単に6人での戦闘訓練もして、宿に戻った。

「明日出発するようですね」

「ああ。タクヤから聞いてると思うが、まあこっちは勝手にやるから気にするな」

その夜。一人でいるところを王子に話しかけられた。このイケメン生徒会長は、俺たちが街を離れると聞いて心配しているようだ。

「クーさんはすごいです。この状況にも最初からあまり動揺してい

ない様だし」

「は？ いやいや、王子の方がすごかっただろ。領主の館での話は聞いたが、とてもじゃないが信じられんぞ」

「ははっ。まあ、たまたまです」

そういつて、照れながら頭を掻く王子。その様子は、見たら9割の女子がときめく様な破壊力のあるしぐさだ。おれが女子ならキュン死にしてるね。くそ、イケメン爆発しろ。

そんな俺の葛藤を無視して、今度は深刻な表情で質問してきた。

「元の世界に戻れると思いますか？」

「……それはわからんな。なぜ突然この世界に来たのかもわからないし」

「そうですね……」

「まだこの世界の事ぜんぜん知らないわけだからな。何も言えん」

「今日、一人、石内くんが死にました」

「……あれはお前のせいじゃないだろ。不意打ちだった」

「僕はこれ以上クラスメイトを死なせずに、みんなで現実世界に戻りたいと思っています。クーさんも絶対死なないでください」

こいつは人が良くて責任感が強い奴だ。何でも一人で背負いこんで、それを解決できる能力がある。それが美点でもあるし、弱点でもある。

「……っは。俺らより自分の心配をした方がいいぞ。ここは現実じゃなくて剣と魔法のファンタジーRPGの世界らしいからな。油断するなよ」

「あはは。大丈夫ですよ。クラスみんながいますから」

『そのクラスのみんなってのにも油断するなよ』

そう言いかけたが、途中で止めた。俺の杞憂かもしれないし、第一こいつにそんなこと言ってもしょうがない。完全無敵のこの王子様はいつだって俺の予想を超えてくるからな。

4 戦闘

4

「ちっ、多すぎだろ」

片手剣を半身に構えながら、フーが悪態を付く。他の仲間もみな、武器を手にし、依頼主である商人の馬車の後ろに付き従っていた。取り囲むゴブリンの群れ。馬車は歩くよりすこし速い程度で、なんとか逃げ出そうと走っている。前方は商人の私兵が先導し道を切り開いているようだ。

状況を三行でまとめると、

場所は商業都市に向かう街道

戦士ギルドで商人護衛の依頼を受けたら

ゴ布林軍団襲来・総数98匹

という感じ。

こうゆう事があるから護衛依頼なんてものがあるんだろうが、いかんせん多すぎないか？しかも街の周りにいた野良ゴブよりかなり強くて統率が取れた動きをしゃがる。知性の高いリーダーがいるらしい。

前のほうにいたゴ布林5匹が同時に飛び掛ってくる。今度の狙いはさあきのようだ。六道が一匹に『ブラインド』を発動し、視界を奪う。また、仁保姫が横からとび蹴りを繰り出し、二匹を吹っ飛ばしてHPバーを半分ほど削るが、残り二匹の攻撃は止められなかつ

た。さあきのHPゲージが6割ほどまで減少する。視界を奪われたゴブリンは、残りの3人でふるぼっこにして消去。

「さあき！後何匹いる！？」

「えっと、えっと。ノーマルが74　ファイターが11　メイジが3　リーダーが1！」

タクヤの声にさあきが応える。さあきの解析スキルは敵の総数と内訳もわかるらしい。思った以上に便利なスキルだ。まだまだ他にもわかるのだろうが、今はそれどころじゃない。戦闘開始から結構たつのに敵の数がほとんど減っていない。

「これでやっと10匹程度か…」

「ああ。このままじゃまずいね。ここはやっぱり…、フリー！魔法攻撃だ！」

「オッケー！任せろ！」

ゴブリンの群れの後方から二つの火球が飛んできた。大きさは一時期流行った、バランスボールくらいはある。ゴブリンメイジの火術『ファイアボール』だ。

フリーは片手剣を鞘に戻し、火球の前に立ちふさがると、それぞれ片手づつで、二つの迫り来る火球を掴み取り、しばらく燃え盛るその火の玉を涼しい顔で弄ぶ。そして勢い良く飛び上がり、ゴブリンの群れに向けて、手にした火球を投げ返した。どうやら先ほど仁保姫が蹴り飛ばしたゴブリンを狙ったらしく、HPバーを失ったゴブリンが一匹消滅する。

フリーの能力『グラブ』と『スロー』。グラブは有形無形にかかわらず、掴めると思ったものは掴める能力で、スローは投げつける能力らしい。それぞれ単体でも使えるが、今回のように魔術相手にはか

なり卑怯な能力である。事実、ゴブリンメイジに対し強力な抑止力となつて、最初の頃は連発してきた魔術による攻撃はかなり頻度が落ちていく。

敵攻撃の主力であるゴブリンメイジの魔術はフーによって抑えられていた。しかし、物量を生かした波状攻撃を前になかなか数が減らせず、こちらだけが消耗していく。このままじゃあまずいかもな。

「クー。このままじゃジリ貧だ。ここはやっぱりアタマ狙いでいこう。さっき言つてたあの連携で」

「おけ。ぶつつけ本番だな。まあたぶん大丈夫だろ」

「よし。みんな聞いてくれ！」

タクヤが素早く指示すると、すぐに六道と仁保姫が動き始めた。

六道の武器は巨大なバスタードソードである。なぜこの武器を選ぶんだのかは教えてくれなかったが、とにかく比較的高めのSTRも手伝つて、軽々と身の丈以上はある大剣を降りまわしていた。単純な突破力なら仁保姫よりも強い。その六道と、戦闘力と体力ではダントツの仁保姫の二人が、密集したゴブリンの群れの中にまっすぐな道を作つて行く。途中ゴブリンメイジの魔術を受けHPバーを削られながらも、二人はなんとか密集地帯を切り抜け、他のやつらより一回り以上デカく、立派な装備をしたゴブリンリーダーに迫った。

側近と思われるファイター二匹がそれぞれ六道と仁保姫が牽制し、突進がとめられてしまう。直後、二人の背後からゴブリンリーダーにむけてタクヤが飛び掛った。巨大なメイスを手に迎撃体制に入つたリーダーに対して、タクヤは空中で交差した腕をバツと開きながら叫んだ。

『時術』『ポーズ』

タクヤのスキル『時術』。時を操れるらしいが、今のところ使えるのは『対象を3秒間停止させる』という『ポーズ』だけ。ちなみに使用前の動作は特に必要ない。タクヤの趣味だ。

『ポーズ』は確かに強力だが、3秒というのは余りにも短い。3秒間では、停止中に一撃叩き込むのがやっとという所。それでは普通ゴ布林リーダーのような強敵は倒せないだろう。だが、今回は一撃で十分。俺がいる。

タクヤが飛び上がってリーダーの視線と時間を奪った直後、俺は前衛の女子二人の影から飛び出していた。派手な三人の動きに隠れてこそこそ動いていたので、おそらくリーダーには認識されてない。一気に距離をつめて、正面からリーダーの首筋に短剣を突き立てる。分厚い皮膚は思った以上に硬く、表面を傷つけたただけであったが、狙い通り俺のスキル『一撃死』が発動し、HPバーが現れることなくゴ布林リーダーは消滅した。

その後、ゴ布林リーダーを失った群れは劇的に統率を失った。中には闇雲に突撃をしてくる個体もいたが、そのほとんどは散り散りに逃げ去り、俺たちは危機を脱した。

タクヤと話していた連携とは『ポーズ』と『一撃死』のコンボである。

『一撃死』の説明では敵に認識されて無ければ発動するとある↓じやあ認識されてない状態で『ポーズ』で時を止めれば正面からいつでも『一撃死』発動するんじゃないね？

という考えを歩きながら話していたのだが、ばっちし発動した。これが可能ということは一撃死は不意を突いて背後から襲うだけじゃなくて、もっといろんな使い方が出来そうである。

残ったゴブリンを処理し、戦利品を回収していると、依頼主の商人が俺たちの元にやってきた。

商人の私兵が二名ほどやられたそうだ。俺たちがいなりや確実に全滅だったらしい。えらく働きを褒められ、今回の撃退戦で得られた戦利品は報酬にすべて貰えることになった。身内が二人も死んでいるのに太っ腹なおっさんだ。さらにスクルドに来たときは頼るといいと言ってきた。結構力のある商人との事。自称だが。

その後、街に着くまでタクヤは商人のおっさん（ああ、そうそう名前がエギル）とずっと世間話をしていた。

情報収集はあいつに任せておいて大丈夫だろう。その後は特に問題も無く、次の日の夕方には街に到着した。

5 方針

5

商業都市スクルド。高い市壁と水の貼られた堀に囲まれた大きな都市だ。石造りの家々に活気あふれる市場。三方には巨大な門と税関が設置されており、残りの一方は川に面していた。城はなかったが、中心部には中々立派な屋敷が軒を連ねており、経済的にはこの国の中心地であるらしい。

エギルのおっさんと別れ、戦士ギルドで今回の護衛の報酬を貰った時には、すでに空が暗くなり始めていた。俺たちは急いで寢床を確保するために宿へ。

「これからの事なんだけど」

部屋を確保し、荷を下ろして一息入れていると突然タクヤが切り出してきた。今後の方針について相談があるそうだ。今いるのはフーとタクヤと俺の男子だけ。女子陣は長旅と野宿のせいでかなり不快だったらしく、揃って水浴びに出かけている。まあすぐに戻ってくるだろう。

「大きく分けて、三つほど考えてる。一つ目は今回みたいに戦士ギルドで依頼を請け負う事をメインに行動すること。この場合のメリットは情報と人脈」

「情報と人脈？」

と、フー。

「うん。今回の依頼でもエギルさんという商人と知りあえて、いろいろ話も聞いた。モンスターやアイテムの情報とか、噂話とかね。戦士ギルドの依頼で護衛や運搬をしていれば、もっとたくさんの人とも知り合えるだろうし、いろいろ情報も手に入れやすいと思う。これは結構大きい」

「ふーん。なるほど」

「デメリットは金はそのなに稼げない点と、あまりモンスターと戦えない所かな」

「それは確かに良く無いな」

モンスターと戦闘をしないと強くなれない。検証した結果、ステータスを上げるためにはスキルを上げるか、モンスターと戦闘してレベルを上げなければならない事が分かっている。スキルを上げるにしても、非戦闘スキルならまだいいが、戦闘用スキルはやはりモンスターと戦闘しないとなかなか上がらない。レベル・スキルは上げておいたほうがいいと思う。RPGの世界で強いに越したことはないからな。

俺も金が稼げたほうがいい。はやくハーレムを作りたいから。などとフーがぼざいているがとりあえず無視な方向で。

「二つ目は冒険者ギルドでモンスター退治をメインにすること。これのメリットは戦闘が結構出来るのはもちろん、金もなかなか稼げる。強めの賞金首を倒せば、一匹金貨10枚とかになるみたいだからね」

この世界の金貨1枚は現実世界での10万円くらいの価値である。貨幣にはあと銀貨と銅貨があって、それぞれ100枚づつで銀は金と、銅は銀と交換できる。この部屋を借りるのに銀貨10枚で、パンがひと切れ銅貨2、3枚。装備品とかはピンきりだが、まあ銀貨50枚あればだいたい買える。金貨10枚あれば6人で一ヶ月は宿を借りながら生活できる計算だ。ちなみに今回の護衛報酬は銀貨50枚。

「一匹金貨10枚か、それなら……」

フーが視線を浮かせてぶつぶつと独り言をつぶやいている。そういえばこいつもエギルのおっさんに色々聞いているようだったから、夢に向けて行動を開始しているのかもしれない。

「後、自由に動けるってのも魅力。早い段階で外の国にも行けそう。戦士ギルドの依頼生活じゃ、どうしてもこの街か王都での仕事が多そうだからね」

「リスクは高いかもしれない。賞金首ってのはやっぱり強いんだろうし」

「たしかにね」

「ねえねえ。なんの話してるの?？」

水浴びを終えて女子組が帰ってきた。水に濡れた髪を横にくくったラフなワンピース姿のさあきが、とことこ近寄ってきて俺の横に座る。他の二人もさっぱりした様子で、布切れで髪を吹いている。ちなみに結構前から服装は現地の裁縫屋で買った洋服になっていた。さすがに現代の制服はこの世界ではういてしまつて恥ずかしいらしい。

「これからどうするかという話し合いだよ。今話してるのは冒険

者ギルドでモンスター退治の旅をするのはどうかって話」

「えー旅は嫌だなぁ。野宿とかするんでしょ？ 今回も結構つらかったのよねー」

ぐちぐちと旅に文句を言い始めるさあき。仁保姫もうんうんと頷いているところを見るとやはり女子には野宿はきついらしい。すぐに慣れると思うが。

「それでタクヤ。三つ目はなんなんだ？」

「ああ。これはさっきのエギルさんからの依頼になるんだけど、『迷宮探索』って言えばいいのかな」

「迷宮？ 探索？ ってどうゆうこと？」

さあきが首をかしげながら質問する。

エギルの話によると、この世界には迷宮が各地にあり、特に珍しいものでもないそう。迷宮内では大量のモンスターが発生しており、放置しておくとも迷宮の周りでも強力なモンスターが出現しやすくなる。この世界の人はその現象を、迷宮からモンスターが染み出してくると表現するらしい。

この世界では、この『染み出し』対策と、モンスターからの資源（魔石やドロップ品）を得るために迷宮を管理している。つまり、迷宮のそばで住み込みながら迷宮探索をしてモンスター退治をして染み出しを防ぎ、その際出るドロップ品で生計を立てる人たちを探索者と呼び、基本的には迷宮ギルドがこれを土地の所有者から依頼を受けて管理しているそう。いだ。

「最近エギルさんが買い取った土地で迷宮が発生したらしくて、探索者を探してたんだって。それで良かったら俺たちに頼みたいって

言ってたんだ」

「よくわかんないですけど、それって得な話なんですか」

ベッドの上にちょこんとすわった仁保姫からの質問。さあきと同じくワンピース姿だが、いつもしているツインテールではなく、後ろで括っているだけの髪形になっているので、すこし違和感を感じる。

「んー。レベル上げと金稼ぎという点では他の二つよりはダントツで効率が良いだろうね。なにせ狩場の前で生活するってことは、基本的にずっとモンスターを狩れることになるから」

「ざっと考えて、一日100匹倒せば、確実に魔石が100個とれる。ウルドの街で俺が周辺のモンスターから拾った魔石がだいたい、一個銅貨50枚だったから、最低でも銀貨50枚、つまり今回の護衛依頼並みには稼げる。しかもこれは最低品質の魔石計算だから、実際にはもっと品質の良い魔石も取れるだろうし、他のドロップ品もあるからもっと稼げるだろうな」

俺の説明にいまいちピンと来ない女子陣だったが、唯一窓際で話を見守っていた六道が反応した。

「デメリットは迷宮のある場所に縛られてしまいうって所かしら？」

その質問にタクヤがうなづきながら答える

「そうだね。ほかの二つに比べて、情報を集めるという目的には都合がよくない。街からも離れて圧倒的に引き籠ることになるから、人とも付き合いづらいだろうね」

話をまとめると

戦士ギルドメイン	情報○	人脈◎	戦闘×	収入△
冒険者ギルドメイン	情報○	人脈△	戦闘○	収入○
迷宮管理	情報×	人脈×	戦闘◎	収入◎

といった感じ。

「俺は金がほしいから迷宮がいい」フーの意見

「私は旅がしたいな。探したいものがあるから」六道の意見

「わたしはできれば街に滞在できたほうがいいですけど……」仁保姫の意見

「お前はどんなんだよ」

俺は隣の幼なじみの頭を叩く。さあきはむっとした顔をしながら俺の手を払うと、少し考えてタクヤに質問をした

「めいきゅうたんさくってのは住み込みって言ってたけど、それってずっと野宿するってこと？」

「いや、違うよ。エギルさんの話だと簡単な小屋を目の前に建てたから、それを使えばいいって言ってた。どれくらいな物なのは知らないけどね」

「え。じゃあ住む家があるんだよね？じゃあそれがいい！」

こいつそーとー野宿が嫌みたいだな。ホームシックか？似合わん。まあそれはいいとして、俺も意見を出さないと。

「俺は冒険者ギルドがいいな。俺の能力も賞金首を仕留める方が向いてるし、現実世界に戻る方法も探さないといけないから世界も見えて廻りたいからな」

これで冒険者ギルド2、迷宮探索2。二択には減ったが、結局はタ
クヤが決めることになったな。

「んー。俺はこーゆー自由度の高いRPGじゃあ初期は金策とレベ
リングに励むのが得策だと思う。話はそれから進めても遅くはない
だろうし。だから、迷宮探索の話を受けようと思うんだけど、クー
と六道、それと仁保姫はそれでいいかな？」

「わたしはみなさんについていきます！」

仁保姫は慌てて答える。六道も無言で頷いた。あいかわらず考えの
読めない表情だったが、まあ大丈夫だろう。

迷宮探索か。タクヤの言うとおり、とりあえず集中して金と経験を
稼ぐって方向も間違っていない、か。リーダーはタクヤだ。

「俺も問題ないよ」

「決まりだね。じゃあ俺は明日すぐエギルさんの所に話を通しに行
ってくる。ついでに必要なものがあるか聞いてくるから、昼からは
みんなで準備を整えるってことで。出発は明後日の朝にしよう」

「はい」

6 契約

6

「そうですか。引き受けてくださいますか」

次の日の午前中。俺はタクヤに付いてエギルの屋敷を訪ねていた。来客用に装飾された広間に通された俺たちは、エギルとの交渉に望んでいる。俺は勧められた椅子に座らずに、険しい顔を作りながら壁際に腕を組んで立っていた。

そっちのほうがかっこいいだろ？

つてのは冗談で、俺はこちらが不利になる条件を出されないように牽制する役回りである。たまに短剣を鳴らして、「舐めた条件は承知しねえぞ？」みたいな顔をしてればいい。おそらく、百戦錬磨の商人であるエギルに脅しなんか意味ないであろうが、まあ無いよりまし程度である。

小一時間ほどの交渉の末、契約内容は次のような感じになった。

- ・ 契約期間は迷宮を消滅させるか、最長半年。
- ・ 素材の売却には週二回、エギルから回収の為に使いを出す
- ・ 魔石は最低でも銀貨1枚。他の素材もモノにより買い取るとのこと

「迷宮を消滅というのはどういことなんですか？」

「迷宮の最奥にある魔方陣を壊せば迷宮は消滅する、という話なの

ですが、実際に最奥までいける人間は迷宮ギルドの連中でも一握りでしょうな。もちろん私も行ったことはございません」

「毎日これくらいは敵を倒せ、とかノルマみたいなものはありますか？」

「そうですね。染み出しを防いでくれる程度には働いてもらいたいですな。具体的には迷宮ギルドの方に聞いた方が良いと思いますよ」

エギルは迷宮についてはあまり詳しくないようだ。迷宮ギルドに依頼申請をしにいかなくてはならないようなので、その時に人に聞いてみよう。情報は集めとかないとな。

少々の雑談の後、昼前にはエギルとメイドたちに見送られて屋敷を出た。メイドいいよねメイド。

「さて、昼までまだ時間あるし、迷宮ギルドへ先にいっておこうか」
「ん。さあき達もいたほうがいいかもしれないが。まあ、後で説明すればいいか」

ちなみに、フーのハゲは見に行くところがあると言って朝から姿を消した。行き先はだいたい予想できる。女子組はなにやら女の子だけで買い物があるといって出かけてしまった。こっちは荷物持ちに駆り出されなかっただけよしとしよう。

「契約についてどう思う？」

「悪くないだろ。ドロップ品を一括に買いあげられるのはちょっと損かもしれない程度かな」

「んー。輸送手段の問題があるからねえ。四次元ポケット的なアイ

テムボックス機能があればいいんだけど。それなら溜め込んで街に持っていけるのに」

「だな。この世界、アイテムについては現実的なんだよな。ステとかレベルとか実装するくらいなら先にそっちを実装したい欲しいわ」

「それ、誰に要望してるの？」

通りすがりの人に道を訪ねつつ10分ほど歩いた。迷宮ギルドは街の中心から少し外れた通りにあり、戦士ギルド、冒険者ギルドも同じ場所にあったので、この辺はギルド横丁と言ったところなのだろう。

中には入りカウンターのお姉さん（猫耳）に、エギルさんから受け取った依頼書を渡す。すぐに手続きが終わり、ひと振りの魔物の毛皮で出来た旗をもらった。これは要するに『この迷宮は専属契約ですよ』という目印らしく、迷宮の近くに立てとけとの事だ。

その後も、迷宮についての疑問をタクヤと二人でネホリハホリと聞いていると、猫耳のお姉さんもさすがに面倒になってきたらしく『仕事がありますので……』といって逃げてしまった。それでも迷宮についていくつか重要な点が分かった。

- ・ 最奥に魔方阵があり、それを壊せば迷宮はやがて消滅する
- ・ 階層どこまであるかは不明。最短では10階くらいだし、100階以上の迷宮もあるらしい
- ・ 入るときは必ず一階から。また、入るたびに構造が変化するということは無い
- ・ 宝箱もあるのが、開くには専用スキルが必要

・猫耳はかわいい

といった感じ。

「いわゆる『迷宮』だな」

「うん。ランダムマップじゃないってことは、レベル上げとマップイングしながら徐々に攻略するタイプだね」

「『魔方阵』を壊せば終わりってのがちょっと変わってるな」

「あまり聞かないね。あ、しまったな。染み出しの件、聞くの忘れてた」

「あー。まあとにかく毎日潜ってれば大丈夫なんじゃね？」

「そうだね。うーん。やっぱりこの世界の迷宮はどちらかというと邪魔な存在なんだろうね。ドロップ品は魅力だけど、それだけならこの世界何処にでもモンスターがいるわけだし」

「土地にモンスターを増加させるだけの天邪鬼ってことだな」

「あの」

「やっぱり攻略には時間が掛かりそうだね。一日一階層を目標にしても、ひと月近くかかりそう」

「まあ慌てて攻略しても危険だからな。安全マージンはしっかり取りながら……」

「すいません」

「ん？」

気がつくとも目の前に人が立っていた。話に夢中で全然気がつかなかったな。とりあえず応対はタクヤ任せにしとくか。

「はい。なんででしょう？」

「見たところあなた方はあまり迷宮に詳しくないようですね。宜しかったら説明しましょうか」

「あなたは迷宮ギルドの方ですか？」

「いえ、違います。わたくし、ディオーンと申します。各地を旅している、そうですね、語り部といったところです」

語り部とは各地の民話や伝説を集めて伝承する職業だったはず。要するに歌わない吟遊詩人だな。

「その語り部がなぜ迷宮のことを？」

「わたくし、知識だけは誰にも負けない自負があります。迷宮についてこそこのギルド員なんかより詳しいはずです。よろしかったら知恵を買ってもらおうかと思ひまして」

「なるほど。それは素晴らしい」

タクヤは渡りに船といった様子で、嬉々として質問を始める。

俺は、横で話を聞きながらディオーンというその男の様子を観察していた。

怪しい。俺の第一印象はそれだ。ぼさぼさの白髪にヒゲまで白い。背は高くなく、まとった外套は薄汚れており、身なりはあまりよくなさそうだ。ぱつと見、白髪のせいで、初老の男に見えたが、よく見るとかなり若いようにも見える。30代か？

おそらく、目的は路銀を集める事と、何か面白い話が聞ければ、といった所だろう。この世界では余り見かけない黒髪黒目の少年二人組が、田舎者まるだしで質問しまくっているのを見て興味を持った。確かに、スジは通っているような気もするが……。

なんか都合が良すぎる気がする。それはこの世界に来てからずっと感じていることだ。

みんなはこの異様な世界、少なくとも現実ではないこの世界にすぐになれてしまった。

人間の適応力とは素晴らしいと思うが、その一方でこの世界の異常性を忘れてしまうのは危険だと思う。

なぜクラス全員まとめてこの世界に飛ばされたのか。

異世界なのかゲームなのか。

HPが無くなれば死ぬのか。

そして、現実に戻るのか戻れないのか。

疑問はいくらでも沸いてくる。その疑問を少なくとも俺だけでも、忘れないようにしないといけないな。

「クー」

「ん……」

「クーもディオンさんに聞いておくこと無い？」

「ああ。わるい。えーと。ディオンさん。この街にしばらく居るの？」

「いえ。明日にはウルドの街に行こうと思っています」

「ウルド……」

最初の街だ。ってことはたぶん……

「そうです。割と新しい街なのですが、その街に突然、奇妙な騎士団が現れたという噂があったので、ちょっと興味がわきまして。ですが、すぐに戻って来ると思えますよ」

ですよー。やっぱり噂になってたか。

タクヤが礼と共に、報酬として銀貨を何枚か渡し、また後日会う約束をしてディオオンと別れた。

「ラッキーだったね」

「まあな。それで、何の話をしてたんだ？」

「聞いてなかったのか!？」

「ちよつとボーとしてた」

まとめると、

- ・ 最奥にある魔方阵はモンスターを生むために存在。
- ・ 先に迷宮内のモンスターから生まれるので、普通に探索していれば、周辺での染み出しは止まる。
- ・ 迷宮が発生する理由は色々な説があつてよくわかっていない。
- ・ ボス、魔方阵の守護者はちゃんと居るとの事。

といった感じ。

「迷宮については大体わかったな」

「うん。しっかり準備と整えていかない」と

「ああ」

「そろそろ集会所行こうか。たぶんみんな待ってるよ」

俺たちは集会所にしていた酒場に向かって歩き出した。

7 ホーム

7

「やっと着いたー」

安堵の声と共に、荷物をほっぽりだして座り込むさあき。明け方にスクルドの街から王都方面の街道に出発し、途中に道を分かれ、木立に囲まれた道をひたすら歩き、目的地の迷宮とその側にある小屋を見つけたときにはすでに日が傾き始めていた。

「まだへこたれるのは早いよ。日が落ちる前に急いで今晚の準備を整えないと」

タクヤがみんなに声をかける。実際思ったより時間が掛かった。迷宮に近づくにつれて、どんどん遭遇するモンスターが増えてきたのが原因だ。染み出しというやつだろう。幸いそれほど強く無いモンスターばかりだったので、そこまで危険はなかったのだが、いちいち荷物を置いて戦わざるをえず、一戦一戦にずいぶん時間が掛かってしまのだ。

用意された小屋は、思ったより大きく、数十人は暮らせるように作られたものだった。木造の二階建てで、一階は暖炉つきの大広間とキッチンがある。二階には粗末なベットがならんだ大部屋が二つと個室が二部屋。現代人の感覚から言わせてもらおうとこれは小屋ではない。一軒家以上の大きさだ。

これからしばらくここをホームにして、迷宮に挑むことになる。

女子陣が異常なテンションで小屋、改めホームを探索し始める。さっそく家具が気に入らないやら日当たりのいい方の大部屋を女子部屋にすることを強制的に決定するやら、てんやわんやの大騒ぎを始めやがった。

「はしゃぐな。まだやることがあるって言ってんだろ。タクヤ、早く指示出させて」

「それじゃあ、フーはとりあえず今日の分だけでいいから薪を集めて。クーとさあきは周辺の探索。モンスターを無理をしない程度に掃除しといて。仁保姫と六道は荷物を開けると掃除をお願い」

「え！？私、探索なの？」

「うん。モンスターの位置がわかるのはさあきしかいないんだから頼むよ」

「ええー……」

「ほれ。さっさといくぞ」

「いたい！髪、引っ張らないでよ！わかった。わかったってばー！」

「俺もいつてくるわー。乾燥してそうな枝を拾ってくれば良いんだろ？」

「うん。その暖炉にくべる様のやつね」

「うーい。タクヤは？」

「僕はちよつと迷宮の様子を確認してくるよ。ギルドでもらった旗も立ててこないといけないし」

「いつてらっしゃいー」

仁保姫と六道に見送られてホームを出発した。周辺は起伏のある林になっており、あまり見通しがよくない。耳を澄ますとさらさらと水音が聞こえるので、その音の方向に向かって歩くと、すぐ小川に

到着した。

「水場確保っと。おい、いつまで落ち込んでんだよ」

「うー。やっと到着したと思ったのにー」

「うるせえ。モンスター掃除しとかないとホームが襲われるかもしれないだろうが。夜中、寝てる時に襲われてもいいのか？」

「それはイヤだなあ……」

「そういうこと。さっさと終わらせないと本当に日が暮れるぞ。ほれ、さっさと位置を教えろ」

「はいはい。えーと。一番近いのはこっちね。バーゲストが3匹」

「よし、いくぞ」

さあきの能力『解析』。さまざまな情報が得られる能力。余りに色々な事が出来るため、いまだにさあき自身も把握し切れていないようだ。わかっている事は、モンスターや他人のステータスやレベルの把握、周辺にいるモンスターの名前と数と位置の情報を得たり、特殊な効果のあるアイテムの鑑定などができるとの事。現状最も使える能力だろう。

木立を分け入ってさあきの示した方向に向かうと、直ぐにイノシシ型のモンスター三匹に出会った。これがバーゲストだろう。体長2mといったところか。けっこーでかい。

「レベルは5。ステはVIT特化20、急所は眉間だよ」

「おけ。一匹ずつやるぞ」

現在のLvは俺が8でさあきが7である。事前に決めてある敵ステータスの報告を受けて、楽勝と判断。一匹に落ちてた石を食らわせて、注意をこちらに向けさせる。こちらに気がついたバーゲストの突進を引き付けてかわすと、すれ違いざまに顔に短剣を食らわせた。

鳴き声と共に突進が止まる。その瞬間にさあきは横から金属製のメイスを脳天に向かって振り下ろし、衝撃によりバーゲストが倒れこむと、あとは二人でボコボコにしてHPバーを削りきっておしまい。

この騒ぎで他の二匹のバーゲストもちちらに気がついて突進してきたのだが、なぜか狙いは二匹ともさあきだった。

「うわあああああ!!?」

巨大なイノシシ×2に迫られて軽く混乱状態に陥ったさあきが突進を避けきれずに吹っ飛ばされて地面をごろごろと転がっていった。

「おい。なにやってんだ。大丈夫か」

「いったーい!! もー怒った!!」

派手に吹っ飛ばされたようだが、HPは2割ほどしか減っていない。大丈夫だろう。

起き上がったさあきはバーゲストに突進すると、大きく振りかぶったメイスを横腹にぶち込んだ。バーゲストの巨体は低い音と共に数十メートルは吹っ飛んで、木々を何本か折りながら転がっていく。うーん、昔から怒らせると相当怖い奴だったが、ばか力はこの世界でも健在なのか? STRはそんなに高くないと思うんだが。

素早く吹き飛んだ一体に追撃を加えて消去。最後に仲間が吹っ飛ばされて呆然としていた一匹を二人でふるぼっこにして戦闘終了。戦利品を回収している間、さあきは汚れてしまった服を払いながら自身の格好を確認していた。

「よく見たら私の格好、いろんなところがボロボロじゃん。せつか

く昨日買ったばかりのボレロだったのに……」

「ひどい格好だな」

「うるさいうるさい」

「はいはい。次は？」

「えっと。後ろ」

「後ろ？」

振り向くと5匹のバーゲストの群れがこちらに向かって今まさに突進を繰り出すところだった。素早くさあきを掴むと、一目散に逃げ出した。不意打ちで5匹は面倒すぎる。

「気が付くのがおせーよ！」

「だってだって！」

走る速度はさあきよりも俺の方が圧倒的に速い。A G Iが倍近く違う上にスキル『ダッシュ』も駆使すれば突進してくるバーゲストをも軽々と置き去りに出来るはずだ。しかし、さあきは引っ張っているこの状態では、逃げ切るのは難しそうである。

「はっ、はっ、はいー」

「おい。この先にモンスターいるか確認しろ」

「え、え、えーと。いないよー。」

「よし。そんじゃお前ちよっとまっすぐ走ってろ。いいか。全力で逃げろよ」

「は？」

そういつて俺はさあきから手を放し、大きくジャンプして、立ち並ぶ木々の枝に飛び乗った。文字通り猪突猛進するバーゲスト達は、そのままさあきを追ってドコドコと走っていく。

「ちよつとー！逃げないでよおー！」

必死な悲鳴が聞こえるがとりあえず無視で。よし。もういいか。

素早く枝から降りると、スキル『ダッシュ』を活用して全速力で前方の一団を追いかける。すぐにバーゲストの一体に追いつくと、視界に入らないように眉間に短剣を掠らせてやる。ほとんど触っただけに等しいその攻撃で、バーゲストは一瞬で消滅した。

スキル『死』のパッシブスキル『一撃死』。三つの条件、すなわち

1 短剣での直接攻撃

2 急所に当たる

3 対象が攻撃を認識していない

を満たしていれば一撃でモンスターを倒せる。この中でもっとも重要なのは3の『対象が攻撃を認識していない』という条件だ。今回は猪型という単純なモンスターだったので、ちよつと視界から消えればすぐに俺のことを忘れてくれるだろう、という読みだったのだが、どうやら当たったらしい。残りも一匹一匹、同じように処理をしていく。

最後の一匹となったところで、ついにさあきが追いつかれていた。前方をごろごろと転がっている。まあHPゲージはまだまだ残っているみたいだから大丈夫だろう。

最後の一匹が倒れこんださあきに更なる追撃を加えようと方向転換をする。止まったその瞬間を見計らって一気に近づき眉間に一撃を加えて、一撃死により即死させた。戦闘終了。

「おーい。大丈夫か」

「……信じられない。見捨てるなんて」

「失礼なことを言うな。四に使っただけだ」

「そっちのほうかひどいでしょ！」

「まあまあ。ほら、いい景色だぜ。見てみるよ」

いつの間にかかなり遠くまで来てしまったようだ。俺たちは林を抜けて、丘陵地帯にまでたどり着いていた。並んだ丘の上からはスクルドの街に続く草原や木立の中のホーム、遠くには鉾山地帯があるのであろう山脈が良く見えた。

現実世界と同じ太陽と、地平線までつづく林と丘陵地帯。人工的なものがほとんど見えないこの景色は、生まれた時からビルに囲まれて育った俺にはひどく新鮮に見える。

突然、さあきが消え入るようにつぶやいた。

「……私達、遠くにきたんだね」

「いまさらだな」

「ううん。なんか、クラスのみんなが一緒だったから全然現実感がなかったんだけど、こうゆう景色を見ちゃうと……」

一回り小さな体を震わせながら、泣きそうな顔。こいつとは物心が付いた時から一緒に居るが、ここまでへこんでいるのは久しぶりだな。

「私達、もう家には帰れないのかな」

「大丈夫。みんなもいるし、王子も絶対みんなで現実世界に帰っていった。なんとかなる」

「……本当？」

赤くなりながら涙目で上目使い。あーこれは効くな。反則だ。くし

やくしゃとその小さな頭を撫でる。昔、本当にガキのころだが、何かの拍子に大泣きを始めたこいつをこうして慰めた記憶がフラッシュバックする。昔と変わってないなこいつ。

「本当だ。約束する。だから泣くな」

「うん」

「んじゃ。探索を続けるぞ」

俺がそういつて歩き出すと、慌てて後ろを追って来た。後ろでござと涙をぬぐう音が聞こえる。からかってやってもいいんだが、まあやめというてやるか。すぐにいつもの様子に戻るだろう。

8 迷宮

8

次の日。迷宮の前にパーティ6人が集まっていた。それぞれが武器防具を身に付け、さらにスクルドの街で補給した照明用の松明（先端に火術の魔石が取り付けられてある簡単な物）、マッピング用にまっさらな紙なども用意して初の迷宮探索に備えている。

今のみなの様子は大きく二つに分かれていた。すこし緊張した様子のフー、さあき、仁保姫ら一般人組。そして、高揚が隠し切れないタクヤ、俺、六道のゲーマー組だ。

本人は隠しているようだが、六道がゲーム通であることは、色々な場面から丸わかりである。妙にアイテムや専門用語について詳しいし、システムの理解も早い。なにより、6人の中で最も楽しそうに戦闘をこなす。その様子は、ゲームの世界の中に入るといふ夢が叶った少年のそれだ。普段は無表情な奴なんだがな。

「よし。それじゃあ入ろう」

タクヤを先頭に階段を下りる。降りた先は小部屋になっており、正面と左右には薄暗い廊下が伸びていた。とりあえずこの部屋にはモンスターは居ないようである。

「さあき。モンスターの情報わかる？」

「ちよっとまって……うわ。たくさん居る。ゾンビ・スケルトン・バット・マンイーター……」

「レベル帯は？」

「んー……9から12って所かなあ。見た感じそのくらい」

「おっけ。それじゃ最初は慎重に進むよ。まずは迷宮に慣れること、そして一階層のマッピングに全力を傾けよう」

「マッピングって？」

さあきが首を傾ける。

「マッピングってのは迷宮の地図をつくることだよ。それがないと攻略どころか迷宮から出られなくなっちゃう」

「地図？でもそれってすぐにわかるよ」

「なんでだよ」

「だって……」

だって地図っていつも見えてるもん。

さあきはそう言い放った。どうやらこいつには常にモンスターレーダ付きの周辺地図が見えているらしい。しかもその範囲は拡大縮小可能で、半径1kmくらいは表示できるとの事。たしかにモンスター1の居場所はわかるって聞いてたが、地図まで表示されてたのかよ。

馬の尻尾のようにフリフリさせているポニーテールを引っ張りあげてぶら下げてやる。

「そうゆうことは早く言え」

「いたいたい！だって聞かなかったじゃない！」

「もしかして、前言っていた建物の情報がわかるってのも、宿屋とか武器屋とかの種類が分かるって意味じゃなくて、構造まで分かるって意味なの？」

タクヤが質問する。最初、二人でさあきの『解析』スキルを検証し

た時に、建物の説明が出ると言う話は聞いていた。しかし、あれは武器屋だとか、あれは雑貨屋だとか言うので、店の種類を判断できる程度に考えていたのだ。

「構造っていうか、うーん。いっぱい有りすぎてうまく説明できないだねー」

「わかった。じゃあこの迷宮に対して見えている情報を全部残さず言え。省略するなよ」

「えー。全部言うの？えーと『ユグドラシル大陸・ノルン王国・スクルド北東丘陵地帯・アスモデウスの迷宮・階層1』。次に『アスモデウスの迷宮・全21階層・出現モンスターレベル「9ー32」』を書いてあって、その下に地図があって、地図上にモンスターっぽい赤い点と良くわかんない緑の点と、私達っぽい青い点があって、右上に『アスモデウスの迷宮・地下1階』って書いてある。あ、あと赤い点に触ればそのモンスターの情報がポップアップされて出てきて……」

『解析』スキル、チートすぎワロタ

「予定変更。さあきはすぐにマップを描く作業を初めて。とりあえずは地図だけでいいや」

「ん。わかったー」

「描き終わるまでは、キャンプ狩りにしよう。適当にモンスターをプルしてくる。フーと六道、ついてきて。クーたちはバフをかけて準備しといて」

「おっけー」

タクヤが、フーと六道を連れて通路に消える。残された仁保姫がすこしおろおろとしていたので、一応説明しておいた。

キャンプ狩りというのは戦う場所を決め、モンスターをその地点に誘導して戦闘を行うこと。プルってのは釣りとも言われてて、仲間の場所までモンスターを誘導してくること。バフっての強化スキルや強化魔術のことで、それをかけて戦闘に備えろってこと。

「あ、なるほど。わかりました！」

慣れない様子でバフを掛けて行く仁保姫。俺も薄い空気の膜を張る『風術』『ウィンドレイヤー』や自然回復力を底上げする『水術』『リジェネレーション』を使用する。まあこれぐらいしかないわけだが。

隣の仁保姫はそれら基本魔術に加え、派手なエフェクトの自己バフを使用していた。

仁保姫の固有スキル『天賦の才・格闘』は基本的に俺がもっている『短剣』スキルなどと同じ、武器スキルのようなものである。武器スキルは上がるごとにさまざまな技を習得する。例えば俺の『短剣』スキルで現在使えるのは『三段突き』と『スローイングナイフ』の二つ。どちらも通常攻撃に毛が生えた程度の技だ。

しかし、仁保姫の固有スキル『天賦の才・格闘』は異常である。自然回復力が大幅に上がる『克己』に次の一撃の攻撃力を大幅に上げる『気合』。通常攻撃の2－3倍のダメージを叩き出す『飛び蹴り』に挙句の果てには『気弾』なる遠距離技まである。

同じスキルレベル5でこの違いだ。元々の格闘技術と前衛向きのステータスに加えて、このスキル性能の違いである。はっきり言ってまともに戦って勝てる気がしない。まだこの世界のシステムに慣れ

ないようで、魔術やスキル関係がきこちないのが弱点ではあるが、それはゲーム歴0時間なので仕方ない事だろう。

「そういえば、タクヤとはすこしは仲良くなったのか？」

ビクッと体を震わせる仁保姫。みるみると顔が赤くなっていく。
あれ？なんか変な事言った？

「な……なんで知ってるんですか？」

なんでと言われても。最初っから丸わかりだったろーが。バレてないと思っていたのか。

「いや。なんとなく…ね」

「うう……」

「ああ見えてタクヤって押しに弱いところがあるから、ガンガン行つた方がいいぞ」

「そうそう。私も前から言ってるんだけどねー」

「さ、さあきちゃんまで……。私だってがんばってるんですよ」

「あ、来たぞ」

「え、ええ!？」

ガチャガチャと金属製のブーツの音を鳴らしながら、三人が走りこんできた。その後ろには、骨モンスター×5が戦闘体制で追走している。目に青い光を宿し、ボロボロながらも武装したスケルトン。定番といえば定番のモンスターだが、この世界に来て始めて見たな。

「仁保姫!」

「は、はい!」

仁保姫がタクヤの声に反応して返事をして、敵集団に向かって勢い良く飛び出した。そして、すでに三人のファーストアタックによりHPを減らしていた敵スケルトン一体に飛び蹴りを放った。

ガシヤンの気持ちのいい音と共に、スケルトンの頭蓋骨が吹っ飛ぶ。続けて回し蹴りの後、体勢を整えてからの正拳突き。流れるような連続技により、スケルトンは無惨にもグシャグシャな白い何かに変わっていた。瞬殺。いやだいやだ。怖すぎる。

俺はスケルトンの敵意を引き付けるため、一体に『風術』『ウィンドカッター』を唱えた。カマイタチがスケルトンのHPを削る。攻撃を食らったその骨は方向転換をしてこちらに向かって来た。残ったスケルトンも、それぞれフー、六道、そして仁保姫が自身に引き付ける。ここからは一対一×4だ。

オンラインRPGの世界ではPTで盾役・タンクなどといわれる役割を持たせることがよくある。これは、敵の攻撃を一身に集めて仲間を守る役割だ。防御力が高くてHPも高いタフな奴が攻撃を受けただけが安全で効率がいい。という考え方である。

この世界でも最初はその方式でいけるかどうか試してみたのだが、どうもうまくいかなかった。いくつかの要因が考えられたが、最大の原因は手軽にヘイト（敵の注意）を稼ぐ手段が無いことである。この世界の戦闘では、敵の攻撃を一人に固定することが難しいのである。

結局、盾役システムが有効に働いたための最も重要なファクターは堅固な防御力でも、膨大なHPでもなく、強力なターゲット固定能力なのだ。その要素を持つメンバーが居ないこのPTでは、それぞれが一对一をしたほうが効率が良い。それが今までの戦闘から分かったことである。

大きく振りかぶったハンドアックスから放たれた攻撃を避け、カウンターに短剣の柄で殴りつける。今の一撃でHPバーをすべて削りきったようで、スケルトンは突然骨くずへと戻り、消滅して魔石となった。切るべき場所がスカスカのスケルトン相手は、おれの短剣とは相性が悪かったが、なんとか倒せたようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3593y/>

放課後RPG

2011年11月22日01時13分発行